概　　説

国内で刊行されている様々な昆虫図鑑を紐解くと、個々の種の分布欄に「近畿以西」「中部以北」と言った文言をよく見る。もちろん、モンシロチョウやキイロショウジョウバエのように国内のほぼ全土に分布するものもあれば、ブラキストン線に従って北海道にしか生息しない種もまた多い。とは言え、大凡紀伊半島を境界として、日本の少なからぬ昆虫が東西に住み分けていることは確かである。

言うまでもなく福井県は本州のほぼ中央部にあたる。したがって、福井県を北限ないしは南限とする昆虫は少なくなく、それゆえ面積の割には多くの昆虫種を擁する。約 20 年前に刊行された「福井県昆虫目録（第二版）」では約 8000 種が福井県産昆虫として記録されている。しかし、その後も新種や新記録種の発見は留まるところを知らず、県内昆虫の種数は右肩上がりに増え続けている。

昆虫の生息地として県内の陸水環境を見ると、本流及び中小の支流からなる九頭竜川水系、北潟湖と三方五湖、農業用ため池、現役水田、休耕田と多種多様な環境が揃っている。梅雨と冬期の年 2 回もの雨期を持つ裏日本に位置することもあってか、福井県は農業県でありながら農業用ため池の数は、しばしば渇水に見舞われる瀬戸内地域に比べはるかに少ない。にも関わらず生物の生息地として好適なため池が残存するせいか、止水性の水生昆虫類相にも見るべき点は多い。

一方、福井県は山国（やまぐに）との印象を持たれがちであるが、隣国加賀国が有する白山系のような真の意味での高山帯を欠く。それゆえ必然的に高山性昆虫類相が乏しいのは仕方がない。しかし、それを補うかのようにブナに代表される山地性落葉樹林や農村の裏山に生える雑木林、嶺南の照葉樹林帯など、これまた多種多様な山林が県内にあり、それぞれの森林の特性に対応した昆虫が育まれてきた。

この他、東西に延びる海岸線も福井県内に位置する昆虫の主要生息地である。大雑把に砂浜と磯に二分される海浜環境は、総種数では森林に劣るとは言え、海浜性ゴミムシやハネカクシ、陸生ガムシと言った海岸特有の昆虫類の住処となっている。

しかし、鳥類や淡水魚類同様、御多分に洩れず福井県内の昆虫もまた一部の種の絶滅が心配される状態にある。今回の福井県レッドデータブック（改訂版）では、県域絶滅 4 種、県域絶滅危惧 I 類 35 種、県域絶滅危惧 II 類 43 種、県域準絶滅危惧 47 種、要注目 129 種、計 258 種を、その危険度の大きさは違えど「絶滅ノ恐レ有リ」と認定せざるを得なかった。

絶滅危惧の危険度による上記 5 つのランク分けは、近年の生息個体数や生息地数の減少度合によって極力数値データに基づいて行うことを大前提とした。もっとも、湖沼の水生昆虫は「1 個，２個・・・」と生息地の換算がまだ可能であるが、森林性のカミキリムシや狩りバチ類の場合は何をもって 1 個の生息地とするかの判断が非常に困難である。また、生息個体数と言ってもオオクワガタのようにそもそも採集が技術的に非常に困難な種の場合、「福井県内にオオクワガタが何頭いるか？」などの問いに対する回答は雲を掴むような話である。それゆえ、種によっては近年の減少度合は担当した調査者のカンに任せざるを得なかった部分もある。とは言え、福井県内には優秀な昆虫愛好家の方々が多く、彼らのカンはカンであっても、自然界における実情を大凡正しく反映しているものと確信している。

（保科 英人）